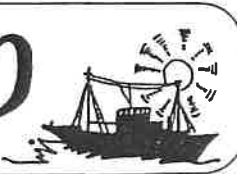


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

五〇年まえの八月、私は旧制市川中学校二年生であった。当時、船橋・中山競馬場に疎開していた陸軍軍医学校中山出張所に四月から勤労働員で『馬の世話』をしていた。『馬の世話』といえは聞こえがよいが、実は「死までの世話」であった。世話される馬は、ガスエソ、破傷風予防血清ワクチンの原料である「血液」を提供する老軍馬であり農耕馬であった。いずれ全採血のために「死」を宣告される。私たち中学二年生は単なる世話では止まらず「死」への協力者となった。つまり敗戦の日まで全採血作業の手伝いまでした。この「少年は馬のいななきを忘れない」特異な体験は、後の第五福竜丸保存運動と共に私の「平和教育」の原点となった。

こうして「戦後五〇年」を思い返すと、これまで「戦争体験」ということ

## 「戦後五〇年」と歴史教育・平和教育

根岸 泉

その悲惨さや不合理さがどれだけ語り続けられてきただろう。しかし、近年子どもたちや青年たちから「なぜそんな戦争に反対しなかったのか？」の疑問が投げかけられ、遂には「反対できなかった」国民にも戦争責任がある」と言い出してきている。このいい方に「加害責任論」が重なるますます「一億総懺悔」につながってしまふ。これはきわめて危険な「真の戦争責任免罪」につながる「あいまいさ」となってしまう。国会の「不戦決議」や地方議会での「戦没者追悼決議」にみられる「あいまいさ」は歴史的事実認識の欠如から生まれる。

私が所属する歴史教育者協議会(歴教協)は、この八月「戦後五〇年、沖縄で考える平和と民主主義——地域に根ざし、日本・世界をみすえて——」をテーマに「第四七回沖縄大会」をお

こなった。とくに、地元沖縄県歴教協の企画である初日の参加者全員による「沖縄見学学習」は「百聞も大切、一見も大切」の呼びかけにこたえたものである。まさしく私たちはこの学習で歴史的事実認識を豊かにすることができたのである。

「戦後五〇年」を契機に、歴教協の各都道府県・支部組織は多様な出版企画や戦争展をおこなってきた。この具体的な一実践として『フォトガイド東京の戦争と平和を歩く』(東京都歴教協編・平和文化発行)がある。島嶼を含め東京都全域にわたって戦争遺跡や軍事施設を掘り起こし紹介している。具体物を通して歴史的事実認識を身につける「教材」としての大切な役割をもっている。

戦争を推し進めたのは誰か！戦争で利益を得たのは誰か！いまだに戦争の後遺症に悩み続けている人びとは誰か！これらを問い続け「あいまいさ」を払拭することこそ「戦後五〇年」の総括だと思ふ。

(歴史教育者協議会副委員長)



久保山愛吉記念碑前ですわりこみ

## フランスの核実験再開決定に抗議のすわりこみ

七月十六日、第五福竜丸展示館前で、フランスの核実験再開決定に抗議する「すわりこみ集会」が行われました。市民団体「STOP P! 核実験連絡会」がよびかけたもので、原水爆禁止日本国民会議、グリーンピース・ジャパン、反核パシフィックセンター、原子力資料情報室などから約60人が参加しました。この日は50年前、アメリカニューメキシコ州アラモゴード砂漠で世界最初の原爆実験がおこなわれた日。世界各地で開かれている記念の集会や核実験反対の行動に呼应しました。

## ピースサイクル出発

七月十九日、第五福竜丸展示館前から30台近い自転車による平和の宣伝隊が出発しました。「ピースサイクル95」の青年たちで、早朝から展示館前に集い、出発集会をひらき、展示館を見学し、体調を整え決意を新たにす、愛用の自転車にとびのり、広島へ、長崎へ、青森県八ヶ所村へとむかいます。

## 反核平和マラソンスタート

「スポーツは平和とともに」「核兵器のない世界を」——七月二十八日、炎天下の第五福竜丸展示館前から、90名近いマラソンランナーが広島、長崎へと出発しました。「被爆50年反核平和マラソン」のスタートで、長崎まで一五〇キロを千人をこえるランナーが駅伝方式で走り継ぎ、原水爆禁止世界大会に連帯、核兵器廃絶をよびかけるもの。新日本体育連盟、全労連、自治労連、国交労連、全教などが共催しました。

## マーシャルから被ばく者

七月三〇日、広島で開かれるNGO国際シンポジウム「原水爆禁止世界大会」に出席のため来日したマーシャルのネルソン・アンジャインさんが、展示館を訪れました。「私の甥でロンゲラップの被ばく者です」と一緒に参加するニック・ティモス・アンタックさんを紹介、共にメジャット島、マジユロの被ばく者の状況を語りました。

んとともにブラカードをかかげて参加、放射線防護のマスクをつけて静かにすわりこみを続ける青年もありました。平和協会の本多喜美副会長も激励のあいさつをしました。日曜日で展示館を訪れる人も多く、訴えに耳をかたむけ、核実験反対の署名に応じ、ワッペンをつけたりと交歓しました。

集会後参加者は展示館を見学、船体下の特設教室でジャーナリスト・岩垂弘さんのビキニ事件の意義にかんする講義を聞き、学習しました。

核兵器と科学者

連載 8

原爆開発の興奮と痛恨 (7)

——対日使用と原子力管理で次々発言——

小川 岩 雄

一九四五年春、原爆がいよいよ完成に近付くにつれ、開発に参加していた科学者たちの緊張と興奮は日増しに高まっていった。だがその一方で、政治指導者や軍部の間では、ドイツに対抗するという科学者たちの当初の意図を離れ、頑強な抵抗を続ける日本への原爆使用を求める声が強まっていた。

しかし、一部の思慮深い科学者たちは、核エネルギー解放の実現や原爆の実戦使用が、戦後の国際関係や長期的に見た米国の国益に及ぼすであろう重大な影響を深刻に憂慮し、大統領への種々の提言や署名運動などを行って、都市への核攻撃の中止を要求し続けた。だがこれらの試みは結局すべて失敗に終わり、彼らが懸念した都市の大災害や戦後の核軍備競争は現実のものとなってしまった。

最も早くから熱心に警告を発し続けたのは、「量子論の父」として国際的に尊敬されてきたデンマー

クの理論物理学者ニールス・ボーア博士である。博士は核分裂現象の理論的解明に貢献したばかりでなく、この現象の社会的、軍事的重要性をいち早く見抜き、一九三九年に訪米したとき、その発見のニュースを研究者仲間にも初めて伝えたと言われている。

博士はその後ナチス占領下の祖国を脱出し、英国に滞在していたが、一九四三年九月、求められて渡米、マンハッタン計画に参加した。彼はドイツの核開発は遅れており、今後のライバルはむしろソ連であろうと予想し、戦後に国際平和を維持するため、ソ連に米英の核開発の状況や原爆の可能性について通報し、原子力の共同管理を提案すべきだと主張していた。

核時代の社会は「開かれた」社会でなければならず、それだけが国際間の信頼をもたらさず、核破壊や軍備競争を避け、原子力の平和的利用を可能にする道だと博士

は確信し、人を通じたり、直接会見したりしてルーズベルト大統領と英国のチャーチル首相に考えを伝えた。大統領はかなり動かされたが、チャーチルは全く耳を貸さず、四四年九月の両首脳会談で、「原爆ができたら熟慮の上恐らく日本に対して使用する」ことなどを申し合わせてしまった。

核使用に慎重論を唱えたのはボーアだけではなかった。とくにフェルミやシラーの下でウランの連鎖反応を初めて達成するなど、原爆開発上重要な役割を担ってきたシカゴ大学の「冶金(やきん)研」(暗号名)では、ボーア来米に先立つ一九四三年の夏頃から、早くも草の根レベルでの研究者の運動が急速に盛り上がった。

彼らの不満の一つは、軍部の戦時規制(機密保護など)や参加企業(デュポン社)の技術独占の危険性、それによる自由な研究の束縛、社員との給与差など、研究運営上の歪みだったが、もう一つは「原爆出現の恐るべき社会的・政治的意義について討議する自由」への軍部からの抑圧だった。

彼らは当局の監視下で集会を重ね、主な苦情と要求をまとめて声明書を作り、約五十人が署名して

当局に提出しようとしたが、副所長アリソン博士の懇望で結局は断念させられた。しかし数カ月後には別のグループが軍部の開発責任者グループ司令官に請願書を届けるなど、運動は根気よく続けられた。そして彼ら若手の気持ちはコンプトン所長らシニア所員もよく理解しており、次第にワシントンにも伝えられるようになる。

一九四五年三月、シラーは原爆の存在や使用が戦後の米国や世界にもたらす有害な影響を分析した個人的な覚え書きをルーズベルト大統領に面会して手渡そうと、予めインシュタインに紹介状を出してもらい、準備を進めたが、大統領の死去で不成功に終わり、トルーマン新大統領との面談も達成できなかった。

六月にはノーベル賞のフランクやシラーら七人のシカゴ・グループが、対日核使用の中止を訴えた詳細な報告書をスチムソン陸軍長官に提出、さらに七月にはシラーら六十九人の請願書が送られたが、着いたのは爆弾投下の最終命令の発令後であった。

(立教大学名誉教授・協会理事)

ビキニとパグウォッシュ

山田 英 二

今年七月末、広島で第四五回パグウォッシュ会議が開催されることになったが、その会議では、広島・長崎五十周年とともに、国連五十周年、ラッセル・インシュタイン宣言四十周年の意義を考える報告が行われることになっている。今年には第五福竜丸のビキニにおける被災から四十一年になる。つまりこの宣言は、ビキニ事件の翌年に公表されたのである。実際、哲学者バートランド・ラッセルと物理学者アルバート・アインシュタイン等によってこの宣言が出されたのは、ビキニにおける実験がその開発者の予想を越えて示した熱核兵器の破壊力が、実際の戦争の中で利用されるならば、人類の破壊を現実にもたらし得るものであることを警告するためであった。

この宣言は、それまでも数多くなされた核兵器に関する発言に比べて、「人類」という観点が強く意識されていることに特徴がある。

その第二節は、「私達が今この機会に発言しているのは、あれこれの国民や、大陸や信条の一員としてではなく、その存続が疑問視されている人類、人という種の一員としてである。」という言葉で始められている。

更に最後の節にも次のような一文がある。

「私達は、人類として、人類に向かつて訴える：あなたがたの人間性を心にとどめ、そしてその他のこのことを忘れよ、と。」

パグウォッシュ会議はこの呼びかけに応えて開かれた科学者の集

まりに端を発するのだから、それはビキニ事件の産み出したものともいえる。最初の集まりはカナダの寒村パグウォッシュで一九五七年に開かれ、これが会議の名前の由来となった。日本ではこれまで二回のシンポジウムは行われたが、定例の会議が開かれるのは今回が初めてで、この開催は、広島・長崎被爆五十周年には是非日本で開きたいという、強い国際的要望によるものである。

この会議は、東西の冷戦下に、核戦争の勃発を何としても防がなければならぬという、強い危機意識のもとに開かれたため、先に述べたような、人類学的観点に立つ理想主義と、東西間のコミュニケーションを計らねばならないという現実主義がないまぜになって、はた目にはその間を揺れ動き続けていたようにも見えた。けれども事態の進展とともに、かつて核凍結を唱えていた多くの平和活動家が今日、核廃絶の現実性を意識するようになったのと平行して、パグウォッシュ会議でも核廃絶への道を

探る議論が中心になされるようになってきた。実際、今回の広島での会議のメインテーマは「核兵器のない世界を目指して」というものである。しかし、現実の核兵器を巡る情勢は決して楽観を許すようなものではない。まだ批准もされていないSTART IIが達成されたとしても、米ロ両国の手には各々数千発の戦略核兵器が残されることになるし、中、仏の核実験再開にも示されているように、英、仏、中の三国は未だにその核戦力の増強を意図している。

私達は、依然として、核兵器を如何にしてなくすかという困難な問題に取り組みなければならぬ状況に置かれ続けている。更に、困難はそれだけでは終わらない。ラッセル・アインシュタイン宣言の中で既に指摘されているように、我々は核兵器をなくすことは出来ても、核兵器を作る知識をなくすことは出来ないのである。私達は、核兵器のない世界から更に進んで、核兵器を作り出さない世界を建設しなければならぬ。

(金沢大学名誉教授・協会評議員) 七月九日記